

佐久間VS高島は予想を遥かに上回る好勝負に。だが数日後、佐久間は突如「引退」宣言

まだまだサヨナラは 言いたくない



つらさを表情をしながら花道を後にする佐久間。高島はすこく機敏があるというが、打たれ強かった。

○4R、佐久間の右ストレートが高島にクリーンヒット。この日の佐久間はパンチからローにつなげるコンビネーションが目立っていた。

○5R、佐久間のハイキックがヒットすると、オアフも高島もグラッ。闘争絶頂のチャンスだった。



○かつての師弟のようなフアイトスタイルを討取、真つ向から佐久間と張り合った高島。フエザー級戦線に面白い存在が台頭してきた。

●ダブル・メイン・イベント第2試合／フエザー級(58kg)契約3分5R(第11試合)

○佐久間晋哉(27歳、身長174cm、57kg、右足蹴) (5R判定3-0) ※高島も5R一戦三連勝

●高島義幸(27歳、身長175cm、57kg、右足蹴) ※高島も5R一戦三連勝



ラウンド	小林	田口	川上
1	10	10	10
2	10	9	10
3	10	8	10
4	10	9	10
5	10	10	9
計	50	46	50

○この僅か首領を物語る。高島は「ゴジで切ろうと思ったけど、逆に切られてしまった。今日は最悪」と試合を振り返った。

○高島、高島の動きを止めた佐久間のローキック、途中高島は根を上げるかと思っただけ、踏ん張り止まらな。



○キック界の布衣英雄。この対戦は「習志野」はM.A.フエザー級の意図的な試合だった。試合中、中絶まで試合を続けたが、最終的には相手を倒したのが災いして、判定はドロー。勝てるはずと見られていた。知村の審判は誰も信じていない。絶対王者になれるのだから。

○練習して練習嫌いを返上。勢いに乗るアラビアン長谷川は相変わらず絶好調。右ヒジ一発で水井(習志野)を大流血に追い込んで、1R2分38秒TKO勝ち。賞状を示した。日本国内ではバンタム級最強?誰かアラビアンの快進撃を止めてくれ



K-U(キック・ユニオン) 習志野ジム25周年記念大会 10月5日●東京・後楽園ホール

K-U史上、ベストバウトと断言できる好勝負だった。その理由は、高島の頭張りに尽きる。佐久間のパンチやヒジによって顔を傷だらけにしながらも、高島は前へ突き進む。何度か足を止める場面はあったものの、最後まで佐久間の猛攻に耐え抜いた。新人時代の高島は、やたら相手

を挑発するトリッキーなキックボクサーだったと記憶している。だが、このところタイで練習し続けた成果なのだろうか、高島はパンチと蹴りがほどよくブレンドされた正統派に変身していた。正直、今大会の観客の入りは芳しくはなかったが、この一戦を見て満足しなかった者はいない。おかげで佐久間は、後退しながらの闘いを余儀なくされた。クリンヒットしている手数は、明らかに佐久間の方が上。にもかかわらず高島がかけるプレッシャーの度合いは弱まらないという、なんとも不思議な攻防が続く。高島に付けるスキを与えたのは、佐久間の方にも原因があった。ひとつは、半年ぶりという試合のプランク。コンスタントに試合を

消化している時にはリングに上がっても「全然緊張しない」と証言する佐久間だが、この日は新人時代に戻ったかのように硬くなってしまったという。もうひとつはスタミナ不足。このころウェイトトレに力を入れていたという佐久間の身体は見違えるほど筋肉質になったが、それとは裏腹にキックで使える持久力は少なくなっていたようだ。佐久間は「ダウンをとって安心したわけじゃないけど、4Rくらいから完全にスタミナが切れてしまった」と打ち明ける。チャンピオンの名譽のためにしておく、高島を倒せそうな場面もあった。とくに3R中盤、スタンディングダウンを奪った直後はKOする絶好の機会だったといえる。

それでも勝負が判定決着になったのは高島の頭張りも去ることながら、佐久間が攻める時の踏み込みが甘かったからだろう。八王子F.S.G.の小林秀至会長は「私が体調を崩してジムを離れていた時、佐久間は練習生を相手にミットを蹴っていた。それで距離感やリズムが狂ってしまったんだと思う」と分析した。佐久間が勝利を収めることができたのは、これまでのキャリアが成せる業としかいえない。最後に力を振り絞るかのように打ち合うことができたのは、応援団からの「佐久間コール」という熱い後押しがあったからだ。試合後、予想以上の接戦となった試合内容に、佐久間と小林会長は「ヤバかった」と口を揃えた。

記者団から11月22日の増田博正戦の抱負を質問されると、佐久間は「このままの体調でいいのかな? 自信がないから何も言いません」と答えをはいらした。はぐらかしたのは単なる照れかと思っただけ、数日後、それが明らかになった。なんと佐久間がジム側に引退を申し入れたというのだ。小林会長にとっても喪失に水の出る出来事のため、必死に慰留に務めているが、佐久間の決意は固いようだ。心配になった私は、佐久間に連絡を取ってみた。もう少し時間が経ったら、お伝えしますから。受話器に出た佐久間は、言葉少なだった。業界にとって、彼の引退は大きな損失。まだサヨナラは言いたくない。

(布施)